

「働きアリさんの話」

館長 長谷部 芳彦

働きアリをずっと観察し、わかったことだそうです。

働きアリは、所属する集団のアリすべてが「働きもの」というのではないそうです。しっかり働くアリとすっかりさぼるアリが集団の中に一定の割合で存在するのだそうです。もちろん、さぼるアリの割合の方が少なく2割ですが、この2割は、働かずえさを食べるだけの存在だそうです。

それでは、働きアリさんだけを集めて、働きアリのみの集団をつくとどうなるのでしょうか。働きもののアリさんだけを集めて活動を見てみると、ちゃんと同じ割合で、集団の中からさぼりアリが出現するのだそうです。つまり2割はさぼるようになるということです。

アリの労働は、卵の世話とかいろいろあって、絶えず誰かが働いていないと巣は維持できないそうです。まさに働きアリによってアリの社会は成り立っているのです。

働きアリは、働き続けるのではなく、オンとオフをつくって働く時と働かない時をつくっていくのでしょうか。それとも、8割の働きアリは働き続け、2割のさぼりアリはさぼり続けるのでしょうか。残念ながら、この話の中では、そこまで触れられてはいませんでした。

子どもの頃イソップ物語が好きでよく読んでいました。「アリとキリギリス」の話はとても印象的で、「アリさんのような働き者が結局は得をするのか、キリギリスのように遊んでばかりではいけないんだな」なんて、子ども心にも思いました。

けれども、今はどちらでもいけないと思っています。アリさんのように働きまわるときも、キリギリスさんのように遊びまわるときも両方なくてはいけないのかなと感じています。

「アリギリス」なんて言葉が勝手に浮かんできます。アリとキリギリスのどちらか一方だけの生き方ではなく、オンとオフの両方が人間には必要なのだと思います。

一生懸命に働くときとしっかり遊ぶときの両方の時間をもつと、元気でいられる気がします。公民館でのサークル活動や図書室のご利用が、皆様の生活の中でのオンとオフの両方に寄与となれたら、こんなに嬉しいことはありません。